

トーレ・デ・ラ・パラダ 2 階第 1 室における
ベラスケスによる慰めの人々の肖像群の装飾意図について

On Program of Interior Decoration for the First Room on the First Floor of the *Torre de la Parada* with Velázquez's Portraits of Court Jesters

美術史領域

序章

ディエゴ・ベラスケス（1599-1660）がフェリペ 4 世（在位 1621-1665）に仕えていた 1630 年代、スペイン王家が所有していたトーレ・デ・ラ・パラダ（Torre de la Parada、狩猟休憩塔）は、絵画装飾を含めた改築事業が行われ、神話画や狩猟画、動物画、王族の肖像画などが 173 点集められた。そのうち、11 点（王家肖像画 3 点、狩猟風景画 1 点、古代神話・哲学者の肖像画 3 点、慰めの人々の肖像画 4 点）が、ベラスケスの作品だった。

当時のスペイン王宮には「慰めの人々」（Hombres de placer）と呼ばれる職制の人々がおり、宮廷の人々の世話をしたり、滑稽な言動で楽しませたりしていた。ベラスケスが彼らを描いた作品は 11 点現存するが、これまでの研究では、彼らの身体的な特異性をことさらに強調するよりも、むしろ人間としての尊厳に重きを置いた表現であるとみなされてきた。しかし、そうした見方は、ベラスケスの慰めの人々の肖像を概括したものであり、それぞれが展示された場所に応じて異なる職の像主を描いたものであることや、同一空間に飾られた絵画の特徴が異なっていたことへの指摘は少ない。

トーレ・デ・ラ・パラダの各部屋の装飾プログラムについても先行研究では明らかにされておらず、慰めの人々の肖像群が展示された 2 階第 1 室の神話画や動物画も含めた装飾プログラムは不詳である。しかし、慰めの人々の肖像群がトーレ・デ・ラ・パラダの中で 2 階第 1 室に集中していることから、他の部屋とは異なる、2 階第 1 室独自のプログラムがあったと考えられる。ベラスケスの慰めの人々の肖像の機能について検討するにあたり、本研究では、他の空間との比較や、先行研究において指摘されている、君主教育のための書物との関連を再検討し、この部屋の装飾プログラム、および慰めの人々の肖像群の装飾意図について再考した。

第 1 章 トーレ・デ・ラ・パラダ

フェリペ 4 世の時代に改築されたトーレ・デ・ラ・パラダは、従来の塔の 1、2 階部分を取り囲むように居住空間が加えられた。その増築部分には、ルーベンスの工房やベラスケスなどによる絵画 173 点（神話画 63 点、動物・狩猟画 50 点、ベラスケス作品 11 点〔王家肖像画、狩猟風景画、古代神話・哲学者の肖像画、道化と矮人の肖像画〕、宗教画 26 点、王室御用邸を描いた風景画 17 点、その他 6 点）が展示された。トーレ・デ・ラ・パラダは、スペイン継承戦争の末期にあたる 1710 年にオーストリア軍による略奪を受け、作品が破壊されたり、持ち去られたりしている。そのような状況については、1700 年のスペイン王家の財産目録に追記されており、略奪による遺失や近隣のエル・パルド宮への移動が記されている。

「王のギャラリー」であった 2 階第 7 室に展示されていた《狩猟服姿のバルタサル・カルロス皇太子》の画面左下には“ANNO AETATIS SVAE VI”（6 歳の年）と銘記されており、それはバルタサル・カルロス皇太子（1629-1646 年）が 6 歳の時に描かれたことを示しているとみなせることから制作年は 1635-1636 年とされる。6 歳という年齢は皇太子を善き君主に育てるための教育が始まる時期にあたり、哲学者や外交官からさまざまな書物が献じられていた。こうした皇太子の君主教育にまつわる書物と、トーレ・デ・ラ・パラダとの関連はすでに先行研究で指摘されてきている。すなわち、トーレ・デ・ラ・パラダの「塔」という建築形態と君主教育とのつながりは、その建物を描写した眺望図にある「Atalaya」（望楼）という書き込みが、君主教育を扱ったエンブレム・ブックにおける「統治」と「監視」を想起させるということである。

トーレ・デ・ラ・パラダは元来、狩猟の際に休憩するための建物であったが、絵画や音楽こそ休息にふさわしい高貴な芸術とみなされ、君主の教育におけ

る絵画の重要性が説かれている。このことから、山田（2017）はトーレ・デ・ラ・パラダに絵画装飾がなされたと推測している。

さらに、2 階第 7 室の《狩猟服姿のフェリペ 4 世》と《狩猟服姿のフェルナンド枢機卿親王》は、皇太子が模範とすべき人物として示され、同じく 2 階第 7 室のスネイエルスによる《猪を殺すフェリペ 4 世》《ダマシカを撃つフェリペ 4 世》、2 階第 8 室のベラスケスによる《イソップ》《メニッポス》は、君主教育で重要視されていた「賢明さ」を身につけるための「巧妙さ」と「経験」の重要性を示す図像であった。1 階第 2 室を飾った 3 点のヘラクレスの絵画は統治者が理想とすべき姿を表している一方で、「アクタイオンとディアナ」（現存せず）、ルーベンスとその工房の《プロクネとピロメラ》と《冥府からエウリュディケを連れ帰るオルフェウス》の 3 点の神話画は、高位の人物が陥ってはいけない教訓を表している。以上のように、トーレ・デ・ラ・パラダには、皇太子の君主教育にまつわる書物の記述と関連があったと見なされる。

第 2 章 慰めの人々

「慰めの人々」（Hombres de placer）とは、スペイン宮廷に仕えていた道化や矮人、狂人などの総称である。文献学者のモレーノ・ピーリャ（1939）によれば、1563 年から 1700 年にかけてスペイン王宮にいた慰めの人々は 123 名を数え、loco（狂人）、enano（矮人）、gigante（巨人）、fenomeno（奇形）、truhán（おどけ者）、gentilhombre de placer（娯楽担当侍従）、simple（馬鹿者、無知）、bufón（道化）、pigmeo（ピグミー）といった名称で分類されている。慰めの人々は、国王をはじめとする宮廷の人々の気分を紛らわす役目を担っており、特異な身体的特徴や機知に富んだ会話で楽しませたり、演劇に出演したり、楽器を演奏したりと、その役割は多岐にわたっていた。特に矮人は幼少期の王子や王女にとってその身体の

小ささゆえに適当な遊び相手であり、彼らの宮廷での知識や経験が王家の子女たちの教育に役立つとされていた。慰めの人々は、王宮の中だけでなく、王族の外出にも随行していたことから、トーレ・デ・ラ・パラダの 2 階第 1 室に展示されていた慰めの人々の肖像画の像主も、スペイン王家の狩猟に随行した可能性が指摘できる。

ベラスケスによる慰めの人々の肖像画は、トーレ・デ・ラ・パラダ以外に、アルカサル宮の「北風の間」から「夏の礼拝室」に通じる階段と、ブエン・レティーロ宮の「道化の間」にも展示されていた。

アルカサル宮の「北風の間」から「夏の礼拝室」に通じる階段には、虎やオナガザル、オウムといった珍しい動物の絵画が飾られていたことから、この空間に展示された慰めの人々の肖像画も、宮廷人にとって珍奇な存在として博物学的関心を向けられていた可能性があった。それに対してブエン・レティーロ宮の「道化の間」に飾られた慰めの人々の肖像画は、フェリペ 4 世の演劇趣味のために劇場が設けられたブエン・レティーロ宮にふさわしい、道化か役者の衣装を着て人を楽しませる仕事をしている道化の姿を描いたものであった。このように、珍品趣味の一つとして扱われることもあれば、彼らの職業を示すにとどまる場合もあり、空間によって慰めの人々の肖像画の意味が異なることがあらためて明らかになった。

第 3 章 トーレ・デ・ラ・パラダ 2 階第 1 室における装飾

1700 年のスペイン王家の財産目録によれば、トーレ・デ・ラ・パラダ 2 階第 1 室に飾られていたのは神話画が 5 点、動物画が 2 点、そしてベラスケスによる慰めの人々の肖像画が 4 点であった。

このうち《アトラス》《パッコスとアリアドネ》《火を運ぶプロメテウス》と、ベラスケスによる慰めの人々の肖像群は、バルタサル・カルロス皇太子に献

じられたサアベドラ・ファハルドのエンブレム・ブック『百のエンブレーサで表された政治的キリスト教的君主の理想』（1640）の第 18、19、72 エンブレーサと関連がある。すなわち、アリアドネは美徳の象徴として、松明を持つプロメテウスは皇太子に王位継承を意識させる存在として、アトラスは王が休息をとれるように代わりに老苦を任された人物として、そして道化は、真実を忌憚なく述べる、王に愛されてきた存在として登場する。

また、《ゾリラとハリネズミ》という動物画は、「ゾリラ（Una Zorilla）」が「雌狐」とも訳せることから、イソップ寓話の「狐とハリネズミ」の教訓を示している可能性が考えられる。山田（2017）はハリネズミと白鳥の絵画が慰めの人々の職業を称えるための機能を果たしていたことも指摘している。

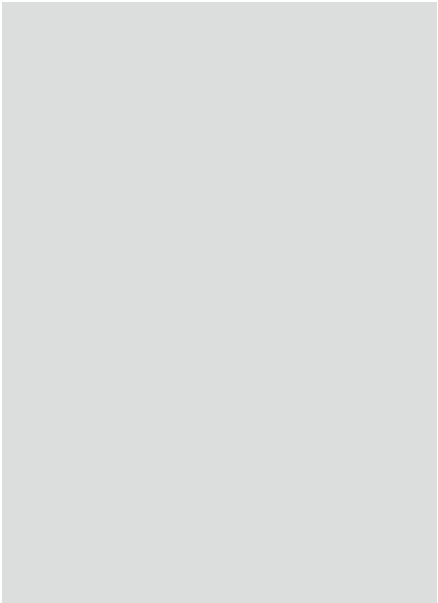
プラド美術館所蔵の《バリエーカスの少年》《道化師カラバーサス》《本と道化》は、1700 年の財産目録で「ベラスケスによる慰めの人々の肖像 4 点」の現存作例と見なされる。これらの絵画には、愚かしさを象徴するトランプや、スペイン語で「愚か者」という意味を持つ瓢箪といったモチーフが描かれているほか、体の小ささを強調するかのように、矮人が大きな本を膝上にする描写がなされている。つまり、それらのモチーフは、像主が慰めの人々であることを確実に認識させる一種のアトリビュートとして描かれていると指摘できる。おそらく、サアベドラ・ファハルドの『百のエンブレーサで表された政治的キリスト教的君主の理想』の第 72 エンブレーサの教訓をこの部屋に視覚的に示すためにこのように描かれたものと推測できる。

2 階第 1 室という空間は、イソップ寓話やサアベドラのエンブレム・ブックといった、皇太子の君主教育に使われる書物の記述を絵画によって視覚的に学ぶことができる空間にすることを想定して装飾プランが考えられたものと推測でき、そのような空間に飾られた慰めの人々の

肖像群は、君主教育の教訓を伝えるためのメディアだったという結論に達した。

終章

本研究で解明にはいたらなかったものの最も重要な問題は、トーレ・デ・ラ・パラダ全体の装飾プログラムが誰によって、どのような意図のもとに作成されたのかということである。1640 年代後半に、王宮特別営繕監察官や美術品陳列のための「八角堂」工事の検査官兼会計官にも任命されたベラスケスが、トーレ・デ・ラ・パラダの装飾プログラムの作成にも関与していた可能性は皆無ではない。つまり、ベラスケスは第三者による装飾プログラムに基づいて絵画化することのみに終始したのか、それとも装飾プログラムの作成にも多少は関わり、絵画化にも中心的な役割を負ったのか。あるいは、装飾プログラムの設定も絵画化にも中心的な存在として関わったのか。少なくともその 3 つの可能性が想定できる。今後、それら可能性を少しでも確証づけられるよう検討を継続したい。



ディエゴ・ベラスケス《バリエーカスの少年》1635-1645 年、油彩・カンヴァス、107×83cm、プラド美術館（マドリード）
〔図版引用典拠：Jose López-Ray and Odile Delenda, *Velázquez. The Complete Works*, Cologne, 2014, p. 215.〕